

〈図書紹介〉

『「生存競争」教育への反抗』

神代健彦 集英社新書 2020年

立命館大学大学院教職研究科1年次生 島田 一輝

私たちは、教育をどのような立場から見て、どのように向き合っていけば良いのか。日本社会の低迷をどことなく感じている現在、その解決を教育に求める声が多い。昨今の教育政策においては、1人ひとりの能力を上げ、スキルを磨き、トップに立つような人材に育て上げることが求められる。そのため教育内容もそこに合わせてのものに変化している。例えば、プログラミング教育や英語教育などに重点を置き指導する方向であり、能力やスキルが高い者が有利になる仕組みが自然と出来上がる。要はどうしても生存競争となる。先日、企業に勤める友人と教育について語り合う機会があったが、優秀な人材を教育でどう育てるか、という話題が終始続いたのが思い出される。

本書では、このような張りつめた教育を「ゆるめる」ことを主軸として、教育学の立場から語られている。最初は「ゆるめる」という言葉の意味を問うのに疑問符がつくかもしれないが、大量の文献から織りなす鋭い考察によって、本書の題である、「生存競争教育への反抗」という意味を真に理解できるようになっている。

第一章では、現代に広く知れわたっている学歴主義とそれに付随する「教育ママ」や「ペアレントクラシー」などの言葉が登場する。明治時代からの歴史を丁寧になぞりながら、教育格差や能力主義について展開しているこの章では、社会学の良い復習になるだろう。

第二章では、現在の教育課程にも求められている「資質・能力」について、ミクロ的マクロ的な視点で語られている。そこで避けて通れな

いのが、世界的なトレンドにもなっているコンピテンシー型の教育論であるが、神代氏はこれにも懐疑的に見解を示している。

「その学習はなんのため？」という意味の問いを離れて、否むしろ、その問いを問う必要を感じないほどに、世界の強度を経験する〜彼らは育つために、自己自身を有能にしていくために世界に出会うのではない。世界と出会うことは、それ自身が価値なのである。

(163頁)

これは神代氏の意見が強く反映された第三章から抜き出した一文であるが、私自身、非常に感銘を受けた部分でもある。この世界とはコンテツのことであり、神代氏は教科を「とびら」として、生徒たちを世界へと誘う、という。

全体的に現代の教育改革に対して批判的な意見があげられているが、私はこの本を読み終えたとき、希望というものを感じた。それは、反抗という主張が、ただ社会に不満を持って声をあげているのではなく、当たり前のように向かっている教育の流れに対し一度立ち止まり、主体的に考えるきっかけをもらえたからである。

最終章では、経済への貢献を消費という面からアプローチした休日のための教育について語られているが、現代の効率を重視した教育に何か違和感をもつ方にぜひ手にとっていただきたい、おすすめの1冊である。

